

## 石井正子編著『甘いバナナの苦い現実』

田中治彦

本書の帯には「名著『バナナと日本人』から約40年—バナナを通して世界と日本を見つめなおす」とある。私に関わってきた(NPO)開発教育協会は2022年で40周年を迎える。開発教育に当初から関わった人々は、鶴見良行の『バナナと日本人』(岩波新書、1982年)を必ず読んでいた。同書の副題は「フィリピン農園と食卓のあいだ」であり、まさに開発教育のテーマをそのまま表現していた。実際、高校教諭であった大津和子はこの本を教材に授業を展開し、その成果を『社会科—一本のバナナから』(国土者、1987年)として出版し、その後教員養成大学に移り後継者の育成に携わった。神奈川のNPO「地球の木」では、開発教育教材として『マジカルバナナ』を製作したが、好評のため最終的に第3版まで発行された。

本書の主題は鶴見の問題提起以来、この40年間にバナナの生産と消費をめぐる状況がどのように変化し、あるいは変わらなかったのか、という点にある。状況の変化については次のようなことが挙げられている。第一に、フィリピン産バナナの輸出先の多様化である。1975年当時はフィリピン産バナナの90%が日本向けであった。すなわち、バナナをめぐる日本とフィリピンの不均等な関係が一对一で見えやすかった。それが2018年には日本向けは30%にまで減少し、代わりに中国が37%と輸出先一位になっている。他にも、韓国、アラブ首長国連邦、イランなどに輸出されている。(第5章)第二に、日本の消費者の嗜好の変化である。かつて、バナナは人数が多かった家族の栄養補給のために一房単位で売られていた。現在は、健康志向や少数家族になったため、基本的には3本単位で、それぞれ特色を出した売り方をしている。(第6章)第三に「高地栽培バナナ」の出現である。高地で栽培されるバナナは昼夜の寒暖差の関係で、栽培期間が低地バナナの1.3~1.8倍かかる。その間により多くの澱粉が実にたまり、糖度が増す。そのため、高地バナナは低地に比べて約2倍の値段で売られている。(第2章)第四に、フェアトレードである。鶴見の問題提起を受けて、日本の生活協同組合やNGO「日本ネグロス・キャンペーン委員会」などにより多国籍企業を介させない「民衆交易」が始まった。国際産直の形をとるため、生産者の労働と健康を守り、地域環境の破壊に加盟することがない無農薬バナナの流通である。(第7章)

これらの動向は鶴見が提起した問題状況をどのように変えたのであろうか。鶴見の問題提起は主に2点あった。ひとつは、バナナ生産過程で使用される農薬の散布によって、現地労働者に健康被害が出ていることである。日本での消費の際の残留農薬についても疑問を呈していた。第二は、バナナ生産に関わる現地の生産者・労働者の取り分が不当に少なく、現地の人々は貧困な状況に追い込まれているということである。

第一の農薬散布問題については第4章で詳細に扱われている。現地での健康被害の事例として、皮膚病、失明、不妊症、先天性異常などがある。ただし、農薬との因果関係

の証明が難しいことも多い。住民に被害をもたらしている農薬の空中散布は現在も続いている。これに対して「農薬空中散布反対運動」も現地では起きている。州によっては空中散布が禁止されたところもあるが、ほとんどは空中散布が続けられている実情が報告されている。

それでは第二の分配と貧困問題は改善されてきたのであろうか。この問題は第3章「バナナ産業で働く人たちの現実」で扱われる。農地改革省の調査ではアグリビジネスの農園では法定最低賃金の支払いは守られている。しかし、農業労働者連合の報告書では異なる実態が報告されている。例えば、出来高払い制、時間外労働、バナナの収穫が少ない時の「ステイ・ホーム」などである。また、スマイル農園の梱包作業所における正規雇用を求める労働者の闘いの様子が紹介されている。

鶴見の問題提起は40年前であり、すでに一世代を経ている。私たちが知りたいのは、この間にバナナ生産に関わった人々の生活が向上しているのか、あるいはいまだに貧困にあえいでいるのか、といったことである。この間多国籍企業は、バナナ生産者がかつての日本の小作制度のように「生かさず殺さず」の状態を維持したのであろうか。自身と子孫の未来に希望がもてないことこそ貧困であり、まさに人権問題であるということが言える。あるいは、「Win-win」の関係だったのだろうか。大文字のWinは大きな利益を上げている多国籍企業であり、小文字のwinは農園労働者である。少ない利益であったとしても、農園労働者の子どもたちが上級の学校に行けるようになった、などの目に見える生活向上があるとしたら、この場合は「公正な分配かどうか」が問われることになる。鶴見の著書では、100円のバナナの内、現地の生産者が受けとっているのはわずか2円という試算がある。現在こうした分配状況は果たして変化したのであろうか。

本書では、最終的には私たちがどのように消費すればよいのかを考えさせる内容になっている。第7章でエシカルな食べ方についてさまざまな提言がなされている。バナナに関わる課題を生産から流通、消費までをトータルに追うことができるという意味でESDの関係者にはぜひ読んでもらいたい一冊である。(コモンズ、2020年8月、388頁、2,500円+税)



田中治彦(たなか・はるひこ) 上智大学名誉教授。